

命なりけり

齊藤 征雄

還暦、古稀を過ぎて喜寿を迎えた。この先、傘寿、米寿、卒寿、白寿とあるが、どこまで生き永らえるかは知る由もない。

自分の年齢を自覚すると、ときどき西行の次の歌が念頭に浮かぶ。

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山 西行

西行六十九歳、没する三年前である。人生の長い旅路に重ねて、昔この峠を越えたことがあったが、二度越えるとは思わなかった。命永らえたおかげだなあ、というように解説される。小夜の中山は鈴鹿、箱根に並ぶ東海道の難所だった。

私には「命なりけり」という言葉が、非常に重く伝わってくる。一般に、長生きしたなあという意味に解釈されるが、そうであるにしても、それ以上に「今生きているんだ」という実感のようなものを、その意味の中に含んでいるような気がする。つまりこの言葉は、今まで生きてきた人生への思いと、その上に今の生があるんだという実感が入り混じった感慨を表していると思うのである。

吉本隆明は、西行は自分の歩んだ人生を宿命として受け止め、それを肯定して「命なりけり」と言ったと解釈している。なるほどと思う。

生きていくことは、たぶん誰にとっても行きがけの道なんですよ。(略) 僕ら普通の人間は、悟りを開いて帰りがけになるなんてことはまずないんだってことが自分でわかっていたら、まずそれでいいんじゃないか。人は誰しも行きがけの道を行く。そうして迷いながら、悩みながら、ただただ歩みに歩いていくうちに、ああ、これこそが自分の宿命、歩くべき道だったんだと思うことがあるんじゃないか。「命なりけり」と気づく時がくるんじゃないか。(『15歳の寺子屋 ひとり』)

ところで、西行を師と敬う芭蕉が小夜の中山を通ったときは、暑い日だった。

命なりわずかの笠の下涼み 芭蕉

こんな暑い日は、笠の下の小さな涼しさに命を感じるなあという意味。芭蕉は西行の歌を当然知っていたはずだが、人生とか難しいことは一切言っていない。それが芭蕉の俳句というものか。